

黒川幸雄, 他(シリーズ編集)/
宮川哲夫(責任編集)

「理学療法 MOOK 4 呼吸理学療法 第2版」

福井次矢
(聖路加国際病院)

今般, 三輪書店の理学療法 MOOK シリーズ 4『呼吸理学療法』が 10 年ぶりに改訂され, 第 2 版が上梓された。本書の最大の特徴は, EBM(Evidence-based Medicine: 根拠に基づく医療)の実践に役立つ情報が提供されていることである。

医療におけるどのような教科書も, それなりの根拠に基づいて, 読者に特定の診断検査や治療を行うよう薦めるのであるが, EBM の実践に役立つ情報とは, 次のような ①～③ の手順を踏んだ情報を意味する。何らかの医療的介入(診断検査や治療, 理学療法など)の臨床的有効性(あるいは無効性)を評価するにあたって, ① 電子的媒体などを用いて幅広い(悉皆性のある)文献検索を行い, ② それらの中から最も信憑性の高い研究の結果(エビデンス)を確認し, ③ 必要に応じて, 国や社会, 医療制度, 医療機関, 患者の個別性に配慮して, 当該医療介入を推奨する(あるいは推奨しない)度合い(グレード)を決める。

本書の第 1 章「呼吸理学療法と呼吸リハビリテーションの EBM」では, 研究結果の信憑性については,

I ランダム化比較試験やメタ分析による根拠

II 非ランダム化比較試験, コホート研究や症例対照研究など

III 症例報告, 専門家の意見など

という 3 段階のエビデンス・レベルを定め, そのうえ

で,

A 有効性を示す強い根拠があり, 必ず行うべきである

B 有効性を示すまざるまざるの根拠があり, 通常は行ったほうがよい

C 有効性は不明であり, 実施に関しては個々の施設, 症例によって判断する

D 危険性を示すまざるまざるの根拠があり, 通常は行わないほうがよい

E 危険性を示す強い根拠があり, 絶対行うべきでない

という 5 段階の強さ(グレード)の推奨を定め, これらのエビデンス・レベルと推奨グレードを用いて, 体位排痰法や外科手術後の呼吸理学療法, 人工呼吸器関連肺炎の呼吸理学療法, 呼吸リハビリテーションなど非常に多くのテーマについて, 詳細な記述が行われている。

第 2 章「呼吸器疾患の病態と呼吸ケア」, 第 3 章「呼吸理学療法のための評価」, 第 4 章「呼吸理学療法の基本手技」, 第 5 章「呼吸理学療法の実践」には, 病態生理に基づいた臨床現場で直ちに役立つ知識・手技が詳しく記述されるとともに, 各テーマの最後の項は必ず EBM に言及されている。

2009 年の現時点でも, 本書ほど EBM の理想に近いフォーマットで書かれた教科書が少ないのに, 10 年前の第 1 版からほぼこのようなスタイルがとられていることは, 責任編集の労をとられた昭和大学宮川哲夫教授の先見の明, 見識の高さによるものである。

●B5 判 500 頁

定価 5,040 円(本体 4,800 円+税 5%)

2009 年 三輪書店・刊